

『御文』における「六字のこころ」

田代俊孝

はじめに

生まれながらにして「寺の子」であった蓮如の使命は、「聖人一流の御再興」であり、その伝道であった。「あきないをもし、奉公をもせよ、狎すなどりをも」(『御文』一帖目第三通、以下、一の三と示す)する民衆と日々、向かいあっていた蓮如は、真宗を自信教人信の立場でいかに伝え、いかに、ともに救われていくかで心を砕いた。民衆と同じ地平に立って信心獲得による救いを願った蓮如は『御文』という方途で教化をした。

そして、その『御文』について『蓮淳記』(『天正十三年記』)には、蓮如が、

「御文」を御つくらせさふらふ事は、安芸法眼申されさふらひて御つくりさふらひて、各々有難く存じさふらふ。かるがると愚痴の者のはやく、心得まひらせさふらふやうに、千の物を百に選び、百の物を十に選ばれ、十の物を一に、早く聞分け申すようにと思しめされ、「御文」にあそばしあらはされて、凡夫の速やかに仏道

なる事をおほせたてられたる事にてさふらふ。⁽¹⁾

と、申されたと記されている。「われら一文不知の尼入道」と同じ所に身を置き、教え示すために深広な真宗の教えの枝葉を省き、精要を煎じつめた。その結果、残ったものがただ念仏のみであった。南無阿弥陀仏の六字をいかに説き、いかに一緒に称えるかであった。したがって、『御文』では、この六字の解釈に真宗の救済原理のすべてを根拠づけている。つまり、六字にすべてが凝縮されているといっても過言ではない。蓮如はそういう念仏理解をしている。

「安心というも、信心というも、この名号の六字のころろを、よくよくころうるものを他力の大信心をえたるひととはなづけたり」(五の二三)⁽²⁾

『御文』の多くに南無阿弥陀仏の六字のころろを知れと勧められている。そして、詳細な六字の解釈がなされている。

もとより、六字釈とは、善導の『観経疏』の所説によるものであるが、今、『御文』ではそれをどのように展開し、そこにどのような教義概念を見出だして解釈しているかを考えてみたい。

—

さて、当時一般に流布していた念仏理解は、『往生要集』や『往生十因』などによる南都北領の聖道門の念仏、

あるいは、西山、鎮西の念仏であった。それは、概して、十九願、いわゆる、多念の立場に立ち、臨終来迎を祈る念仏理解であった。つまり、数多く称える念仏の善根功德によって死の瞬間に仏の来迎にあずかり、死後に安楽浄土へ行くという救いの念仏であった。

それに対して、親鸞の真宗の立場は、現生正定聚であり、蓮如においては、西山、鎮西の臨終業成に対して、平生業成と受け止められている。本願成就の他力回向の念仏であり、決して祈りの念仏ではない。すなわち、本願成就文に「其名號を聞いて信心歡喜す」と示されていることからすれば、仏の救いの真実、仏の大慈悲をわれわれに届けるのは、まさしく、仏名による。

また、「行卷」には、元照の『弥陀経義』の文を引いて

「我弥陀は名をもつて、物を撰取したまふ」⁽³⁾
と示される。

また「教卷」には、

「仏の名号をもつて経の体とするなり」⁽⁴⁾

とある。従つて、経（『浄土三部経』）もそのすべてが念仏のいわれであり、釈（七祖）もすべてが念仏の解釈である。むしろ、すべてがその文字についての解釈ではない。直接、文字の上で解釈した最初のもものは、善導の「玄義分」における六字釈である。

そこでは、

「今、この『観経』の中の十声の称仏には、すなわち十願十行、具足せることあり。云何が具足す。南無といふは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏というは即是其行なり。この義を以てのゆえに必ず往生することを得⁽⁵⁾」と釈される。

もとより、これは、当時、撰論宗の一派が念仏宗に対して、願と行が具足していないとの批判に応えたものである。つまり、『観経』で造悪不善の大悪人が、臨終に十念称名して、往生したというのは、虚説ではないが、ただちにそう受け取るべきではない。十念の称名とは、行といえるほどのものではなく、願だけといふべきである。したがって、長い時を経て後によりやく往生できるのであり、ただちに往生できるといったのは方便であるとの説である。この方便説を別時意説と言われている。

これに対し、善導は、上の所説を述べ、念仏往生とは、仏の方において成就した南無阿弥陀仏に大願も大行も具足しており、それをたまわつて称える衆生の一声の念仏が願行具足であるという。それゆえ、いかなる悪人でも必ず往生することができる⁽⁶⁾と示されたのである。

南無に、「帰命」と「発願回向」の二意を取り、阿弥陀仏に「即是其行」の意を取つて、発願回向と即是其行で願行具足を主張し、反論したのである。

しかも、願行を衆生が領受することが、帰命という表現であるとした。

これらの立場を親鸞は名号釈で、

「しかれば南無の言は帰命なり。帰の言は至なり、また帰説（よりのたのむ）なり。説の字、悦の音、また帰説（よりかかるなり）なり、説の字は、税の音、悦税二つの音は告ぐるなり、述なり、人の意を宣述るなり。命の言は、業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召すなり。ここをもつて、帰命は本願召喚の勅命なり、発願回向と言ふは、如来すでに発願して、衆生の行を廻施したまふの心なり。即是其行といふは、すなわち選択本願これなり。」⁽⁶⁾

と示す。

ところで、蓮如は『御文』で六字のころを説くにあたり、善導の「玄義分」の解釈を簡明に示して、それでもって、念仏理解をしているものがほとんどである。

具体的に示せば、直接、六字釈をあげたものに、

(三の六) (三の八) (四の八) (四の一四) (五の二一) (五の二三)

がある。そのほか、六字のころを釈しているものに

(二の一四) (二の一五) (三の二二) (三の四) (三の五) (三の七) (四の六) (四の一一) (五の五) (五の八)
(五の九)

があり、合わせて十七通がある。

親鸞の名号釈によらず、ことさら、善導の六字釈によるがゆえに、「善導ずわり」の印象を持つが、果たしてそうか。『御文』では、特に、六字釈から、他力回向、二種深信、機法一體の立場を六字のころとして撰めて説く。

しかるに、それが、親鸞のどこに基づくかを明示して、さらに、どのように領解されたかを次に述べることにする。

二

真宗における最も重要な教義的立場の一つは、他力回向の義である。この立場を蓮如は念仏のいわれを尋ねる中で、説き示している。

もともと、親鸞は、「行巻」で、他力について、

「いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば、撰取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う。」⁽⁷⁾
と述べる。

そして、善導の六字釈からさらに、

「帰命は本願召喚の勅命なり、発願回向とは、如来すでに発願して、衆生の行を廻施したまふの心なり。即是其行といふは、すなわち選択本願これなり。」⁽⁸⁾

という。これは、まったく法のはたらきとして示し、若不生者の願力を意味している。他力回向の根拠を発願回向に求め、帰命も本願からの衆生に対する撰取の呼び声と教示する。

そして、『選択集』に寄りつつ、

「明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行にあらず、かるがゆえに不回向の行と名づくるなり。大小の聖人、重軽の悪人、みな同じく、齊しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし。」⁽⁹⁾
と不回向の義をのべる。

今、これらの立場に基づいて、それを蓮如は、南無阿弥陀仏の六字の解釈の中で説き示す。
たとえば、

「一念に弥陀をたのむ衆生に無上大利の功德をあたへたまふを、発願回向とはまうすなり。」(五の一三)⁽¹⁰⁾

「帰命の一念のをこるとき、かたじけなくも遍照の光明を放ちて行者を撰取したまふなり。このころすなはち阿弥陀仏の四つの字のころなり。又発願回向のころなり。」(三の六)⁽¹¹⁾
と。さらに、このことを即是其行でも示す。

「阿弥陀仏のその衆生をよくしらしめして、萬善萬行恒沙の功德をさづけたまふなり。このころすなわち阿弥陀仏即是其行といふころなり。」(四の八)⁽¹²⁾

「回向といふは、弥陀如来の衆生を御たすけをいふなり。」(『蓮如上人御一代記聞書』三七)⁽¹³⁾
と、つまり、光明撰取、功德回向を、六字の解釈で説いているのである。

もつとも、発願回向に即是其行の意を含めて、ただ発願回向だけの釈で即是其行の解釈のないものもある。(五の五)(五の十二)

逆に、即是其行に発願回向を含めて、ただ即是其行だけの釈がされている場合もある。(四の八)

二義とも同じ意として釈されている場合もある。(三の六)(四の十四)
さらに、不回向についても、善導の六字釈の引用解釈の後、

「そのころいかんぞなれば、阿弥陀如来の因中において、われら凡夫の往生の行をさだめたまふとき、凡夫のなすところの回向は自力なるがゆえに、成就しがたきによりて、阿弥陀如来の、凡夫のために御身勞ありて、この回向をわれらにあたえんがために、回向成就したまいて、一念南無と帰命するところにて、この回向をわれら凡夫にあたえますなり。かるがゆえに、凡夫のかたよりなさぬ回向なるがゆえに、これをもつて如来の回向をば、行者のかたよりは不回向ともうすなり。このいわれあるがゆえに、南無の二字は帰命のころなり。また、発願回向のころなり。」(二の八)¹⁴
と述べ、続いて

「このいわれなるがゆえに、南無と帰命する衆生を、かならず撰取不捨してすてたまはざるがゆえに、南無阿弥陀仏ともうすなり。」(同)¹⁵
と、撰取不捨のいわれを説く。

ようするに他力回向を六字釈の発願回向と即是其行のことばに見いだし、念仏のいわれの解釈で説き示している。まさに、南無阿弥陀仏に他力の意味がこめられており、そのいわれをたずぬれば、おのずと他力回向の教えが分かる」と説いているのである。

次に、『御文』に説かれる念仏のいわれには、真宗の救済の根本原理である二種深信が説かれる。

もとより、親鸞は『尊号真像銘文』に

智栄の善導讀を積し、

「称仏六字といふは、南無阿弥陀仏の六字をとなふるとなり。「即嘆仏」といふは、すなわち南無阿弥陀仏をとなふるは、仏をほめたてまつるになると也。また、即懺悔といふは、南無阿弥陀仏をとなふるは、すなわち安樂浄土に往生せむとおもふになる也。また、一切衆生にこの功德をあたふるになると也。」⁽¹⁶⁾

と、説く。「即嘆仏」とは、法の深信であり、「即懺悔」とは機の深信である。すでに親鸞自身、善導によつて、南無阿弥陀仏に二種深信の立場を領解している。

さらに、同じく『尊号真像銘文』には、善導章に

「言南無者といふは、すなわち帰命とまふすことば也、帰命はすなわち釈迦・弥陀二尊の勅命にしたがひて、めしにかなふとまふすことばなり。このゆへに即是帰命とのたまへり。亦是発願回向之義といふは、二尊のめしにしたがふて安樂浄土にむまれむとねがふころなりとのたまへる也。言阿弥陀仏者とまふすは、即是其行

となり、即是其行はこれ、すなはち、法蔵菩薩の選択の本願也。安樂浄土の正定の業因なりとのたまへるころ也。⁽¹⁷⁾

と、帰命と発願回向を衆生の信心つまり、機の方で受け止め、阿弥陀仏はその機を助ける本願の法であるとする。

このことを『御文』では、

「南無の二字は、衆生の阿弥陀仏を信ずる機なり。次に阿弥陀仏といふ四の字のいわれは、弥陀如来の衆生をたすけたまへる法なり。」⁽¹⁸⁾^(二の七)

と随所で示す。

もつとも、南無の解釈の帰命を機、発願回向を法として、阿弥陀仏の義を略している場合もある。^(五の五)^(五の十三)

また発願回向と阿弥陀仏を同一に衆生を助ける法としている場合もある。^(二の六)^(四の十四)
いずれにしろ、南無阿弥陀仏のいわれを説く中で、二種深信を説き示している。

さらに、『御文』では一歩進んで、機法一體の南無阿弥陀仏と説く。^(三の七)^(四の八)^(四の十一)^(四の十四)
^(帖外六五)^(帖外六六)^(帖外八二)^(帖外八九)^(帖外二二九)

たとえば、前に引いた^(二の七)には、続いて

「このゆへに機法一體の南無阿弥陀仏といへるはこのころなり。」⁽¹⁹⁾

といい、また^(四の八)では、

「このゆえに、南無と帰命する機と、阿弥陀仏のたすけます法とが一體なるところをさして、機法一體の南無阿弥陀仏とはもうすなり。」(四の八)⁽²⁰⁾
という。

ところで、この機法一體という言い方は、親鸞にはない。『安心決定鈔』に見られる。そこでは、

「十方衆生の願行円満して、往生成就せしとき、機法一体の南無阿弥陀仏の正覚を成じたまひしなり。かるがゆえに、仏の正覚のほかは、凡夫の往生はなきなり。十方衆生の往生の成就せしとき、仏も正覚をなるゆえに、仏の正覚なりしと、われらが往生の成就せしとは、同時なり。(略) 仏の正覚は衆生の往生より成じ、衆生の往生は、仏の正覚より成ずるゆえに、衆生の三業と仏の三業とまったく一體なり。」⁽²¹⁾

と説かれる。つまり、本願の若生者と不取正覚の関係から、仏の正覚は衆生の往生成就したところにおいてかなう。従って、仏の正覚成就そのままが、衆生の往生成就であるとの理解である。そして、その正覚のみ名であるから、そのまま機法一體であるというのである。いささか、十劫安心に近い理解になるが、それもそのはずで、慧空の『安心決定鈔翼註』によれば、西山の書と断定されている。⁽²²⁾

真宗において機法一體という用語を最初に用いられているのは、覚如の『願々鈔』であり、続く、存覚の『六要鈔』にも用いられている。

真宗の場合は、『安心決定鈔』の理解とは異なり、機とは仏をたのむ信心をいい、この信心は衆生のほうにあるので、信ずる機とか、たのむ機といわれる。法は、その機を助ける仏の力、はたらきをいうのである。この仏を信

ずる機とその機を助ける法は、光と闇の關係で表裏一體であり、それが、仏の正覚のみ名の上に成就されているというのが機法一體の南無阿弥陀仏ということである。南無は仏を信ずる信心であり、阿弥陀仏の四字は衆生をたすける力と受け止められる。機も法も同一体で、仏願の成就するところである。それゆえ、凡夫はただ南無阿弥陀仏を申すのみである。

むすび

かくして、蓮如はむずかしいことはいらない。ただ南無阿弥陀仏だけだといい、その六字に真宗の救済原理の根本を見いだした。そして、門徒に「六字のころ」「六字のいわれ」を尋ねよと勧め、そうすれば、そこからすべてが流れいずると示したのである。文字通り「当流の安心の一義というは、ただ南無阿弥陀仏の六字のころ」(五の九)⁽²³⁾であった。徹底した念仏為本である。

しかし、同時に「なにの分別もなく、くちにただ称名ばかりをとなえたらば、極楽に往生すべきようにおもへり。それはおおきにおぼつかなき次第なり。」(五の一一)⁽²⁴⁾といい、そして、「信心をもって本とせられ候う。」(五の一一)⁽²⁵⁾と示す。諸行に対しては「念仏為本」であり、その上でさらに心の有様として「信心為本」であったのである。しかも、その信は、「他力の信心をとるというも別のことにはあらず。南無阿弥陀仏の六つの字のころをよくしりたるをもつて信心決定すとはいなり」(五の一一)⁽²⁶⁾とか、「六字のころをよくよくころうるものを他力の大

信心をえたるひと」(五の二三)⁽²⁷⁾といわれるように、六字のころを心得ることが信心を獲ることであるとさえ言う。すなわち、信心も別の心ではなく、「南無阿弥陀仏のうちにもれるもの」(四の六)⁽²⁸⁾として領解されている。それが、当時の人々には最も「わかりやすい」真宗理解であったのであろう。六字の念仏にすべてが包摂されていたのである。

〈註〉

- (1) 『真宗史料集成』第二卷四二二頁
- (2) 『真宗聖典』(東本願寺版、以下同じ) 八四〇
- (3) 『定本親鸞聖人全集』一一六一
- (4) 『定本親鸞聖人全集』一一九
- (5) 『定本親鸞聖人全集』九一三二
- (6) 『定本親鸞聖人全集』一一四八
- (7) 『定本親鸞聖人全集』一一六八
- (8) 『定本親鸞聖人全集』一一四八
- (9) 『定本親鸞聖人全集』一一六九
- (10) 『真宗聖典』八四〇
- (11) 『真宗聖典』八〇二
- (12) 『真宗聖典』八二六
- (13) 『真宗聖典』八六一
- (14)・(15) 『真宗聖典』八〇五
- (16)・(17) 『定本親鸞聖人全集』一一九二―一九三
- (18)・(19) 『真宗聖典』八〇四
- (20) 『真宗聖典』八三六

『御文』における「六字のころ」

『御文』における「六字のこころ」

- (21) 『真宗聖典』 九四三〜九五〇
- (22) 『真宗全書』 四四一―四二一
- (23) 『真宗聖典』 八三七
- (24) 『真宗聖典』 八三八
- (25) 『真宗聖典』 八三七
- (26) 『真宗聖典』 八三八
- (27) 『真宗聖典』 八四〇
- (28) 『真宗聖典』 八二一